

冬季スプレーギクにおける植物成長調整剤の使用時期が切り花品質に及ぼす影響

～ 消灯30日後の処理で、頂花の花首伸長を抑制 ～

1. はじめに

冬季作のスプレーギクでは、切り花のボリューム不足による品質の低下が問題になっている。キクでは植物成長調整剤（ビーナイン顆粒水溶剤）は、花首や節間の伸長抑制による品質向上を目的に用いられているが、その使用時期など、使用基準の幅が広く、明確な使用方法が定まっていない。ここでは、植物成長調整剤の使用時期が切り花品質に及ぼす影響について検討した。

2. 材料および方法

材料は、‘ガルーダ’、‘セイヒラリー’ および ‘セイプリンス’ を供試した。2019年12月10日に床幅90cmのベットの直挿しし、栽植密度は15cm×15cmの枠に2株ずつの6条植えとした。無摘心栽培とし、日最低夜温が15℃以上となるように加温した。電球色蛍光灯で暗期中断（21:00～2:00）を定植時から行い、2020年1月21日に消灯した。その後は自然日長で管理した。ビーナイン顆粒水溶剤の処理時期として、①定植30日後区、②消灯時区、③消灯10日後区および④消灯30日後区を設置し、1,000倍に希釈した液を100l/10a散布した。また、対照として無処理区を設けた。

3. 結果

いずれの品種、使用時期においても伸長抑制効果がみられるものの、切り花長に対する効果的な使用時期は品種により異なり、‘ガルーダ’では消灯時区、‘セイヒラリー’では消灯10日後区、‘セイプリンス’では消灯30日後区で最も効果が高くなった（図1）。切り花を80cmに調整し、基部から20cmまでの葉を取り除いた調整重は、‘ガルーダ’では消灯30日後区、‘セイヒラリー’

では消灯10日後区、‘セイプリンス’では定植30日後区で最も重くなった。また、頂花の花首伸長は、いずれの品種においても消灯30日後の処理で抑制される傾向が認められた（図2）。

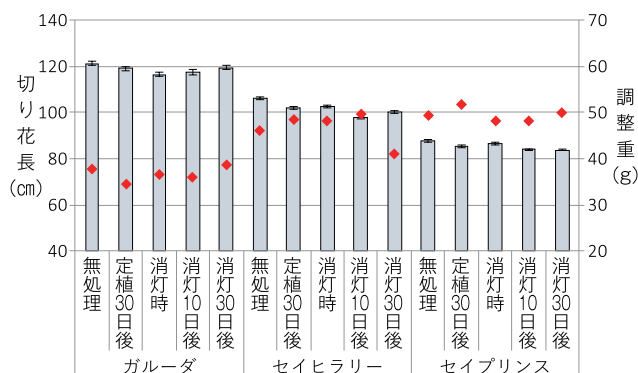


図1 植物成長調整剤の使用時期が切り花長および調整重に及ぼす影響
エラーバーは標準誤差を示す
□切り花長
◆調整重

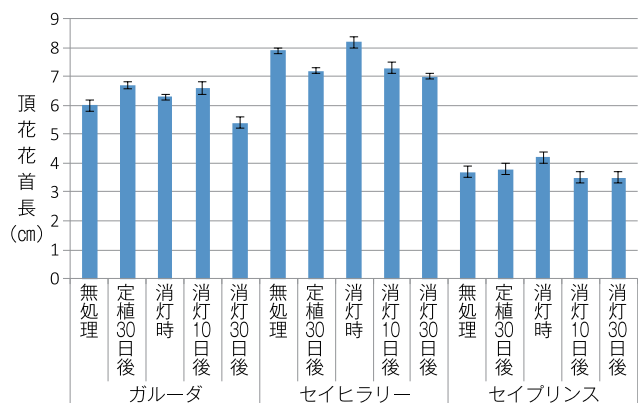


図2 植物成長調整剤の使用時期が頂花の花首長に及ぼす影響
エラーバーは標準誤差を示す

4. おわりに

切り花品質への影響が大きい使用時期は品種により異なっていた。頂花の花首伸長については、いずれの品種においても消灯30日後の処理で抑制される傾向が認められた。今後は、植物成長調整剤の使用回数、使用濃度等について調査する予定である。

（栽培部 宮本 芳城）